Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan

119

森　の　通　信　　2015. 12. 22

(Indonesia の森林火災・泥炭地火災と闘うバスキ/Friends of National Parks Foundation)

CONTENTS

・People(38)パウリヌスさん・・・・・・・・・・・・p3
・インドネシアの火災現場から・・・・・・・・p4～p6
・大規模森林火災を目の前にした、FNPFの立ち位置、私の立ち位置・・・・・・・・・・・・・・・・p7～p8
・パリCOP21以降の大きな課題・・・・・・p9～p10
・バスキさんインタビュー・・・・・・・・・・p11～p12
・ボルネオエコツアー報告・・・・・・・・p13～p15
・パーム油学習会第3弾報告・・・・・・p16～p17
・世界の森林ニュース・・・・・・・・・・・・・・・・・・p18
・会計より・HPリニューアル・・・・・・・・・・・・・p19

Save The Tropical Forests
ウータン
Hutan
森 の 通 信
2015.12.22
119

大規模森林火災緊急募金のお願い

史上最強！と言われている今年のエルニーニョ。その影響でインドネシアでは大規模火災が頻発。ヘイズ（煙害）等が、国際的にも大問題になっているようです。

ウータンがエコツアーや植林活動を行ってきたタンジュンプティン国立公園付近でも被害は甚大。プランテーションによる土地の乾燥、森を切り開いて開発する際の火付けによって、大規模な森林火災が起こってしまいました。現地では、バスキさんをはじめＦＮＰＦのメンバーが消火の最前線に立ち、必死の活動を続けてきました。

今タンジュンプティン国立公園では、やっと鎮火した土地に多くの地元ボランティアが集まり、毎週植林を行っています。この火災をきっかけに新たな人々が関わるようになり、現地では森林保全の機運が盛り上がっているようです。

しかし一方で、来年のエルニーニョは猛威をふるうと予想されており、再度被災が危惧されます。来年に向け、現地では消火チームを結成予定。機材不足が課題の一つとなっています。検討の末、ウータンではまずジェットシューター（背負った水袋から噴射する消火機材）などを送ろうと決めました。11 月の集会から募金を呼び掛け、皆様のご協力で先日 3 つ購入。1 月に西岡さんが持ち込みます。更に 3 つ購入し、2 月に近藤さんが持ち込めないかと検討中です。

芽生えた希望・森を守るため、募金へのご協力をお願い致します！！（武田）

ゆうちょ銀行　００９３０−４−３８８０　ウータン・モリトセイカツヲカンガエルカイ
※「インドネシア火災寄付」と用紙に記載してください。

【ウータン活動記録】

2015.9.8　ウータン会議
9.11　ウータン Website リニューアル会議
9.15-27　インドネシア調査（西岡）
9.26　ウータン Website リニューアル会議
9.29　ウータン会議
10.3　エコツアーインタビュー動画お披露目会（中井信介さんゲスト）
10.9-18　インドネシア調査（近藤）タンジュンプティン国立公園内外での消火活動について聞き取り
10.13　ウータン会議
11.4　龍谷大学「国際協力論」でワークショップ（石崎）
11.10　ウータン会議
11.13　エコツアーについて名古屋 NPO センターから取材（石崎）
11.14　スタディツアー説明会に参加（西岡、武田）
11.18-20 RSPO（持続可能なパーム油の円卓会議）に参加（石崎）
11.21　インドネシアの森を守ろう！緊急集会「森の再生はこれからだ！」
11.23　パーム油学習会第３弾サラワク先住民の声を聞け！ゲスト樫田秀樹さん
12.1　持続可能な消費・グリーンコンシューマーネットワーク会議に参加（石崎）
12.1　ウータン会議

People (38) Paulinus(パウリヌス), C.O.P.

C.O.P.-Centre for Orangutan Protection(オランウータン保護センター)

Badman present the words, Don't Broken Heart! Nice! Paulinus—**挫けない心！素晴らしい**

（2014 年 9 月、タンジュン･プティン国立公園外のジュルンブンのアグロフォレストリー地で）

=写真・Adut Forester/**文**・Badman Nishioka

人生、何があるかわからない。パウリヌス！2015 年 9 月 20 日、オランウータン保護センターのパウリヌス君も私も野生のオランウータン調査を諦め、この燃えていたジュルンブンの消火。「君は若いからもっと作業！」と私は鎮火活動をもっとするよう促す。「Badman,また仕事?」と。若い時に何でも Try（挑戦）する心と体が、後になって役立つのだ。特に他人のために働く。森林火災が続いているインドネシアのタンジュン・プティン公園一帯。本日の鎮火作業は水がなくなったから終わりだ。ハラパン村に戻り、安堵の時間に突然、悪い知らせの電話がかかる。妹からだ。西カリマンタンで森林火災は、中カリマンタンより少ないからと私は安心していた。「えーエエっ、家が、家が焼けたよ。父さん、母さん、みんな無事か・・。」涙が止まらない。タオルで涙を拭くパウリヌス。聞けばオランウータン保護センターに勤め出して、給与を家に仕送りして、彼らの家を建てたそうだ。「あす、クマイの事務所に戻ろう。飛行機が飛べたら私が払う。飛べないなら車で至急帰れ！」と促す。翌日、家を守ろうとした祖父が森林火災で死んでいた。何が起きるかわからない。葬儀を終え、無残の焼けた家を後に、またこのタンジュン・プティン公園の鎮火活動にパウリヌスが戻って、今も働いている。Nice! Paulinus! Don't give up all! 2016 年 2 月不死鳥となり、日本でオランウータン保護、火災を伝えるのだ! Come to Japan!

インドネシアの火災の現場から！―燃える大地、泥炭湿地、森林火災

＝逃げるオランウータン、大半の再植林も燃える！＝対策はこれからだ！　代表・西岡良夫

【飛行機飛ばぬ！タンジュン・プティンへ強行】

9 月 16 日、関空からジャカルタへ飛ぶ。だが翌日のケタパン空港へのフライトが火災で飛べない。夜中慌ててオランウータン保護センター代表ハルデイ氏がホテルに来る。「同行予定のパウリヌスも東カリマンタンの火災でジャカルタへ来れない」翌日調べると、カリマンタンでフライト出来る空港は 2 つだけと判る。予定を大幅変更し、せめて再植林・【オランウータンが住める森】作りを勧めている私たちとして確認のため、タンジュン・プテイン公園だけでも行きたいとハルデイ氏に伝える。飛行機が飛べたなら、火災があろうと何としても行くと決める。

16 日夜半にジャカルタからオランウータン保護センターの事務所があるジョクジャカルタへハルデイ氏と列車に乗る。時々目が覚める。何故か。

17 日、オランウータン保護センターでビデオ作成をするが時間なく、昼過ぎに着陸できるバリク・パパン空港へ立つ。同空港へ当然遅れて到着。パウリヌス君はチャーター車で迎えてくれた。ここからタンジュン・プテイン公園までは 24 時間かかるのだ。車の中での僅かな仮眠。

既に中カリマンタンに入ってから、火災は極度にひどく、太陽が見えない。道は 20m先しか煙のため見えない。火災はあちこちで広がり、アブラヤシ農園や泥炭湿地と思われる土地が異常に燃えている。18 日の夜中にやっと FNPF(Friends of National Parks Foundation)のクマイ事務所に到着した。夜中にアドウが来てくれた。

「ハラパン村と上部のジュルンブンの火災はどうか。また植林地のブグルは大丈夫か」と尋ねる。

アドゥは「前よりジュルンブンの火災が酷い。村人も火災が怖くて行かない。ブグルは燃えてない。もうすぐバスキも消火活動から戻って来る。1週間以上鎮火作業し、彼も少しの休息が必要」という。

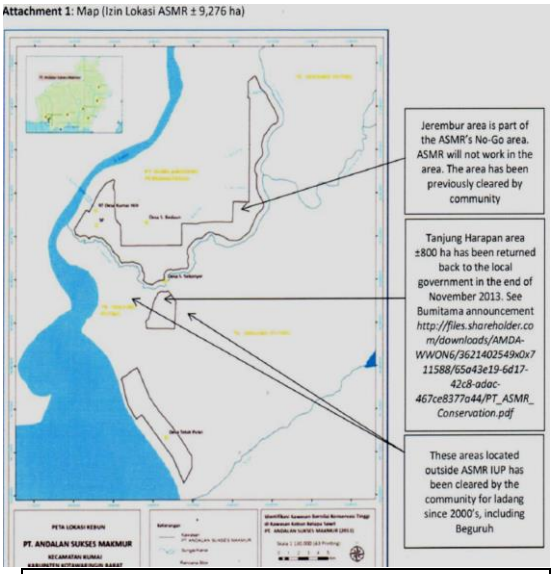
バスキが来た。水をググーと飲みほす。深呼吸して床に寝る。その姿勢でアドウ達に伝言する。彼は起き上がり握手する。「この分だと 9 月いっぱい、10 月も植林どころか鎮火活動だ。ラマンドウの植林地は大半が燃えた。支援のボーイング社の再植林の報告書作成は困難」とポツリと言う。

私は「ラマンドウは大火になってしまい、他の地でも鎮火が全て済んだら植林を再開すると素直に書けば良い。まずこの地の鎮火が先だ。今回オランウータン等の調査が出来なくとも仕方ない。鎮火」と伝える。バスキも微笑んだ。疲れて消灯だ。

【足元が熱い！鎮火作業でくたばる！】

19 日、早朝からツーヤン氏のスピードボートでハラパン村を越し、ジュルンブンへ向かう。若いイサム、その他の仲間が迎えてくれた。持参したコーヒー、ラーメンをすすり、鎮火作業だ。私はちょうどアブラヤシ農園地域で未だにアブラヤシ企業の誰もが鎮火に来ない燻り続けている方向を見た。昨年撮影した状態と同じで、PT. AMSR 社はやはり鎮火作業をしていないのだ。全く同じ写真が次の頁だ。泥炭火災はアブラヤシ農園からだろう。

昨年 9 月末のアブラヤシ農園の火災。鎮火者無し



図の上枠地ジュルンブンは生物多様性が高いから開発困難である。中枠地・ブグルは地元自治体に PT.BGA 社が返還した。開発無しと。下枠地のパダン・スンビランは開発対象外と 2014 年 11 月に BGA 社は曲りなりに回答。火災は絶対起こさないと。ところが今年 9 月 ASMR 社のアブラヤシ開発予定地の各地で火災！鎮火活動しない企業が[Zero Burnings(火災 0)政策]と言う！

池を拡大し泥水で鎮火活動に使用の FNPF

泥水を詰め込んだ消火器を背負い、泥炭湿地へ行く。燃えている。バスキとアドウが叫ぶ。「ここを消したら、次の地へ行く。まず完全に消火作業することだ。」私は初めの頃はゆっくり作業したり、写真を撮っていたが、みんなが疲れてきたので、ホースで消火する係と交代。代わった者は少し休憩して、泥炭地の中に火が混じっていないか、と鍬やシャベルで土壌を掘り返す作業だ。

続けて泥炭湿地に水を注入する。マスクが邪魔になる。よく見ると大半のメンバーは邪魔になり、マスク無しで懸命に作業している。背負い消火器の全ての泥水がなくなった。池に水を入れる役目はきつい労働していないパウリヌスともう 1 名。

（9 月から 10 月まで消化活動の FNPF の仲間）

鎮火しても次の所が燃えている。行けども行けども泥炭湿地での火災活動が続く。休息は水汲みに行っている時と、作業を交代する時、そして簡素な昼飯の時だけ。休憩が済んだら、また鎮火作業だ。私はラマンドウのような平地で鎮火活動に参加したが、平地は消火作業し易いが、この下から沸き起こる泥炭湿地の森林火災の作業は困難の一言だ。しんどい。

続けて消火し続けて、1 名の老人は大幅に休憩する。私は、泥水での消火係に徹し、撮影をパウリヌス君に任せた。泥水入りの消火器から水をかけ続ける、泥炭の大地に・・・。これしか方法がない。ヘリコプターや消防車は何の役にも立たない森林内の泥炭湿地の火災作業。深呼吸する。靴の一部が燃えたから水をかける。このほんの少しの地区は何とか鎮火出来そうだ。大地・泥炭湿地に私はくたばる。バスキ、アドウ、イサムの屈強トリオが作業する。また作業を開始する。午後 4 時を超え、9 時間目の労働。水を汲みに行ったイサムが言う。「バスキ、池の水が全てなくなったよ・・・・。」

「仕方ない。作業中止。Mr.Badman Nishioka、パウリヌス、アドウはハラパン村へ戻れ。俺はこの地の火災が拡大しないか点検で残る」とバスキ。

「OK、分かった。作業終わり」とアドウが言う。

ツーヤン氏の船でハラパン村に戻る。アドウは「今日は祭りだから、夕食は問題ない」と言う。休息の後、食事にパウリヌスらと午後8時に出かける。アブラヤシ農園方面が夜中じゅう燃え続けていた。もう 3 日目になるという。アブラヤシ企業は一体何をしているのか。やはりアブラヤシ企業が問題だ。

BGA 社や ASMR 社は、RSPO を通して、火災を起こさないとの文章を私たちに返答しているが、火災が発生しても自分たちの開発予定地の鎮火もせず、村や泥炭湿地の消火活動にも参加しない。「Zero Burning」と宣伝する嘘つき企業にこれ以上のアブラヤシ開発を許すわけに行かない。

【127000 件、50 万人被災、CO2/16.5 億トン】

7 月から 10 月まで少しの雨も降らず、乾ききった泥炭湿地、乾燥を好むアブラヤシ農園から火が付いても消そうとしない体制。ちょうど地方選挙もある年で、初期初動が遅れたため、大火災となった。インドネシア大統領ジョコウイ氏も 9 月 23 日にカリマンタン等の火災を視察し、中カリマンタン 6 企業に操業停止命令を下した。だがどうか・・・？

火災数は 9 月 20 日に 6000 件(未確認情報多い)が、9 月末には 12000 件に、10 月 18 日には 4 万件、被災者 30 万人、10 月末に被災者が 50 万人、127000 件、CO2 等温室効果ガス 16.5 億トンに上り、日本を遥かに越す温暖化大発生国となった。帰国後に現地の情報を聞くが、企業等のチエック体制が弱い。アブラヤシ企業の対応が悪すぎる。全てのアブラヤシ開発を一時停止すべきだ。

カリマンタンの火災地で茫然自失のインドネシア・ジョコウイ大統領[2015・9・25 Jakarta Globe]

【今こそ大々的な支援が必要でないか・・？】

10 月末にオバマ大統領は「インドネシアを支援する」と表明し、11 月 2 日インドネシア大統領と緊急会談した。日本は何をしているのか。各国がサポートを表明してから、報道がされだしたが、緊急援助の話すら政府は 11 月 6 日を越しても表明しない。首相はウラニウム等鉱物資源開発の国を訪問し、巨額の ODA を含め融資している。

インドネシアだけが大火災でない。アラスカ、カリフォルニア、ブラジルでも火災が 7 月—9 月に勃発して地表の気温が 2000 年以降上昇気味を更に押上げ、0.2 度ほど気温が上がった。北極圏や南極でも氷解がこの 5 年で急速に進んでおり、熱帯を取り巻くエル・ニーニョの状態も極めて悪い。温暖化防止目標を昨年 9 月、**「ニューヨーク宣言」**として国連が掲げた。だが外務省は日本語概要を同省ホームページにアップしていない。これでは日本政府に環境問題を任す訳にいかない。支援を NGO から NGO へ。再植林が不可欠だ。

大規模森林火災を目の前にした、FNPF の立ち位置、私の立ち位置

近藤美沙子

2015 年 10 月 10 日。5 か月ぶりに見るカリマンタンの地は、煙に覆われていた。見慣れた飛行機からの景色―熱帯林とその間をうねるように流れている川、パンカランブンに近づくにつれはっきり分かってくるアブラヤシのプランテーション―が、今回は全く見えなかった。窓の外は真っ白で、着陸の約 1 分前、やっと地上がうっすらと見えだした。「よくこれで着陸できたな。」そんな私の動揺を見抜いてか、隣の人がマスクを手渡してくれた。

ハラパン村では、火災よりも水の問題が住民の主な関心だった。例外的な乾季により、村の中心を通る水路の水位が下がり、満潮時に川を逆流してきた海水が水路に流れ込んでくる。そこで水浴びを続けているため、かゆみを訴える人もいる。「子どものために」と、整備されていなかった井戸をきれいにしたり、新しく掘ったりしている家もあった。またバナは、自分のロッジ裏にある池を、近隣住民の水浴び場として整備していた。

もちろん、村が火災の影響を受けていないわけではない。9 月初旬に始まった火災は、村のすぐそばでも起こっており、学校を 1 週間休みにしたり、2-3m 先を歩いている人の姿が見えないほど煙が濃い日もあったそうだ。タンジュン・プティン国立公園内の消火に向かう人々は、ハラパン村の対岸にある船着き場から入るため、消火チームが村に出入りすることもある。「バスキはずっと森にいるね。」村で火災が話題に上るとき、必ずといっていいほど、バスキの名前を耳にした。消火活動には、村人も含む様々な人が関わっている。でも、ここでは、バスキが消火活動の象徴として見られているように感じた。それは、ハラパン村の人たちだけではない。ブグルまでバスキに会いに行った際、消火現場から戻ってきたばかりの友人（観光ガイドをしている）に会ったが、彼もまた、火災の話になるとバスキの名前を真っ先に述べた。「バスキは、この 8 日間寝ていない」と彼は言っていた。

バスキに会いにブグルまで行った日、消火活動について、一部ではあるが、実際に見聞きして分かってきたことがある。国立公園内での消火活動には、FNPF の他、OFI、国立公園関係者、そして観光ガイドが主となったボランティアグループが関わっているということ。「消火活動」と一口に言っても、最前線で消火をする以外に、現場を支える道具、食料、水など必要物資を届ける人、宿泊・休憩場所である小屋を修理する人、取材に来た人を森の中まで案内する人など、様々な役割が必要とされていること。そして、そういった人員配置のためのコミュニケーションの難しさ。私がバスキと会うだけでも、電波状況の悪いなか、とにかく電話のつながる人を捕まえるために、何件も電話をかけて、伝言ゲームのようなやり取りをするのに 1 時間くらいかかった。「今どこに誰がいてどのような状況か」ということがよく分からない状態で、連絡を取るだけでもかなりの労力が取られる。

10 月 14 日。村での最終日の朝は、いつもより煙が濃く、100m先ほどが見えにくい。喉が痛いような気もするが、朝には電気がないため、窓やドアを開け放ち、家の中にも薄くもや～と煙が充満している。やっとマシになった 10 時頃、パダンスンビランへと向かう。3 時に出発する頃には、少し煙が濃くなってきていた。近くで火災が起きているのを確認しようとしているのか、アドゥは左右を注意深く観察していた。オフィスに着くと、バスキがパダンスンビランでの消火準備に大忙しだった。ひっきりなしに電話をかけて、スタッフに出動の準備を指示する。川から水を引くためのパイプや給水ポンプを借りる手配をする。アドゥと 2 人で手分けして、どこの誰が今必要な道具を持っているか、こちらのホース、あちらのホースが何mあって、いくつつなぎ合わせたらセコニャール川から水を引くことができるか、それらの道具は壊れかけていないかなどを確認し、人員配置を指示する。電波の悪い森の中にいる仲間たちに、途切れ途切れの電話を何度もかけ直していた。柳原さん、丸山さん、私は、緊迫した様子の彼らを目の前にして、火災の現状を聞くに聞けずに、ただ見守るしかなかった。現場の状況が

全く分からず聞きたい気持ちは 3 人ともあるが、目の前の火災を最小限に抑えるために色々と調整して疲労している彼らに対して、知識ゼロの私たちにも分かるような丁寧な説明を頼むことはできなかった。

10 月 15日、丸山さんと私がジャカルタに飛ぶ予定の日。空港に着くと、煙害で飛行機が飛べず、チェックイン時刻が延期されていた。やっとチェックインを済ませても、機体は到着する気配がない。煙は見る間に濃くなっていく。19 時すぎに「本日のフライトは全て明日に延期」とアナウンスがある。約 8 時間、何もない空港で過ごしたことに疲れと苛立ちを感じつつ、FNPF オフィスに戻った。出迎えてくれたアドゥと話をする暇もなく、ブグルにいるバスキから、現在の出火地点を衛星で確認するよう指示が入った。煙のせいで私たちがカリマンタンから出発できない。ここにいると彼は私たちの側にいてくれる。でも、煙が濃いのは近くで火災がひどくなっているしるし。本来、彼は消火活動の加勢に行くべきだ。バスキはアドゥをかなり頼りにしている。私たちのせいで彼が足止めをくらっているようで、心苦しい。明日こそはなるべく早く飛行機が飛んでくれたら・・・、そう祈るしかなかった。

翌日、また半日空港で待ちぼうけをくらったものの、出発することができた。この日ラッキーだったのは、空港のカフェテリアで、消火活動から戻ってきたばかりのガイド 2 人と知り合い、消火活動について聞き取りをすることができたこと。彼らに写真を見せてもらいながら話を聞けたため、どんな消火活動をしているか具体的な絵が見えてきた。ブグルのような泥炭湿地では、地上で木が燃えるだけではなく、地下（泥炭で構成されている層）に引火することが問題で、それを止めるためには、2～3mある泥炭がしっかり濡れるまで水をかけないといけないが、水の確保が困難。川から数キロ～十数キロ離れている地点なので、水の入手方法としては、森のなかの水源を探して、井戸や池のようなものを掘る、場所によっては水源からパイプを引いて簡易プールに水をためて使ったりもする。また、水が足りないケースなどでは、燃えているところを消火することは諦めて、木を切り倒して道をつくることで、それ以上の燃え広がりを防ぐこともしている。政府が手配した水爆弾（出火地点で水を振りかける）を運ぶヘリコプターも、4 回ほど出動したが、効果は薄い。水爆弾によって地上の火を消したり火の勢いを抑えたりはできるが、泥炭の引火を完全に消すことはできないから。そんなことをするくらいなら、彼らがつくっている簡易プールにでもその水を降ろしてくれたらいいのに・・・とのことだった。

インドネシアを出ても、10 月末に雨が降り始めるまで、毎日のようにカリマンタンに電話をかけた。毎日色んなサイトを駆け回ってパトロールや消火活動にあたっている様子を聞くたびに、6 日間の滞在中、アドゥやイビがずっとアテンドをしてくれたことを振り返り、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。ただ、あのタイミングであの場にいたからこそ、今は電話だけでもだいぶ話が通じて、日本への報告もできるし、どうやって彼らを元気づけたらいいかも分かる。私の滞在は無駄ではなかったし、無駄にしてはいけないなと常に自分に言い聞かせる。（続く？）

左：燃え広がりを防ぐためにつくられた道

右：燃える泥炭（地面）から、根が引火した木

パリ COP21 以降の大きな課題 2015 年 12 月温暖化防止締約国会議(Report)

西岡良夫(Badman Nishioka/HUTAN Group)

【昨年 9 月ニューヨーク宣言で気温上昇 2 度迄困難】

11 月 30—12 月 13 日まで温暖化防止締約国会議がパリで開催される。昨年 9 月に国連は**【ニューヨーク宣言】**で、2030 年の温暖化防止につき、最終的に「森林破壊を Zero に、気温上昇を 2 度までに留める」という重要事項を取り決め、各国が行動目標を設定するよう促した。そして、EU は早々と動いた。日本政府は外務省ですらこの【ニューヨーク宣言】の概要の日本語版をアップしないまま 1 年を越した。

米国はオバマ政権の支持率下落もあり、オバマ大統領は中国に昨年 11 月に働きかける。昨年 12 月にオバマ・周首脳会談で「排出国 1,2 位が削減目標を大きくしよう」が取り決めた。(11 月 7 日＊中国の排出量は 2030 年 17%増の予想も出た。NY Times)

今年 1 月末、米国は 2025 年で温室効果ガスの削減目標を 1990 年比で 14-18%減、2005 年比で 26-28%と打ち出す。EU は既に 90 年比で 40%、2005 年比で 35%の削減行動を打ち出していた。日本は 1990 年比約 18%、2005 年比で 24.5%としたまま。それも石炭発電・原発再稼働を中心の策だ。

年度(基準年)	日本	米国	EU
1990 年比	18%減	14-18%減	40%減
2005 年比	24.5%	26-28%	35%
2013 年比	26%	18-21%	24%

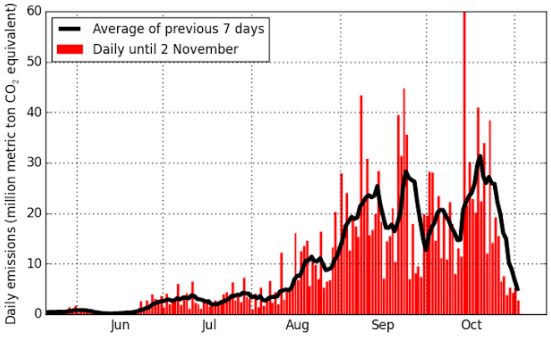
【原発再稼働・石炭発電新設の温暖化対策・日本】

Paris 会議最終合意に向けて、10 月 30 日まで国連で最終会議が持たれ、【気温上昇 2 度以下非常に困難】と表明し(毎日新聞等)、「各国がもっと協力的で、積極的な行動を！」との内容を示した。それは約 1/4 の国が削減値を立てていないから。既に 2000 年比で気温が 0.5 度以上上昇し、1970 年からなら 2.3 度上昇(NASA ・新 Data)した。京都議定書での基準年を 1990 年比と各国で決めたが、日本政府は突然同日に「2013 年比で 26%削減」と言い出した。内容は 2011 年に福島原発大事故が発生し、原発稼働が 0 となる。原発稼働させないと原発利益を生めず、**温暖化対策内容は[原発 20-22%、石炭 26%、LNG27%、再生エネルギー22-24%]**。安全性確認なしの今ある古い原発全てを再稼働させて 20%を電力源とする計画である。杜撰すぎる対策!!

【積み残されると予想される課題・・火災等の災害対策、森林破壊、原発、鉱山開発、地域での取組み】

今年6月ボン会議までの主な課題は北極圏の氷解への取組み等であり、今後海水面が 70cm上昇し、経済も大打撃となるから「先進国7カ国会議」でも[2度以下の気温上昇への行動]表明だった。NGOs だけでなくドイツ、デンマーク、フランス等が動き、シェル石油等に油田開発停止への行動もはじまった。そしてアラスカでは 6 月末から火災が各地で発生していた。火災は止まず、米国で 9 月にカリフォルニアからカンザスへの火災も発生し、オバマ大統領は 9 月末にアラスカ、北極圏をも視察し、火災停止出来ていないこともあり、11 月 2 日、北極圏開発を一時キャンセルするよう命じた。50 社が賛同したのだ。「気候変動の火災」と外電が報じる(日本で報道無)。

その頃、インドネシアでは 8 月末からアブラヤシ農園や一部の泥炭湿地から火災が発生していた。10 月末までの火災が 127,000 件、16.5 億トンの温室効果ガスの発生量[資料:NASA]。日本より多い排出量で、被災者は 50 万人以上。11 月もまだ火災は停止していない。また写真のようにブラジル・アマゾンでも広範囲の火災で、全世界の火災で 34.2 億トン(正確想定データ無)の増加との推定もされだした。



このように、今まで国連 SBSTA 等や各国では、災

害問題による温暖化が疎かにされ、対策が後手になっている。中国は温暖化防止の資金援助を表明するが、原発輸出を日本と同様に画策している。

またブラジルはアマゾンの 400 のダム計画で温暖化防止対策としている。科学者たちは「大半のダムは乾季に発電困難、温暖化防止を逆に阻害」と報告し、ブラジル銀行責任者も「ダムはドブに金を捨てるもの」と大統領に苦言したが、大統領は無視した。

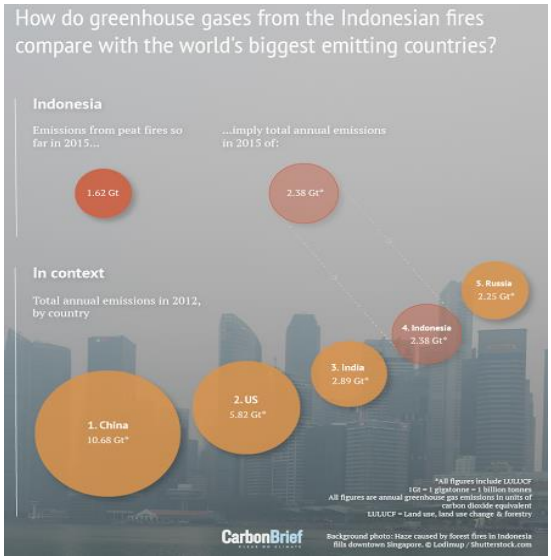
そしてペルー、エクアドル等でカナダ、中国企業が石油、鉱山開発を強引に進めようとしている。これは国連 SBSTA でほとんど取り上げられていない。CO2 が逆に増加し、アマゾンで森林破壊と鉱山開発で CO2 吸収から大発生に繋がるとも懸念される。

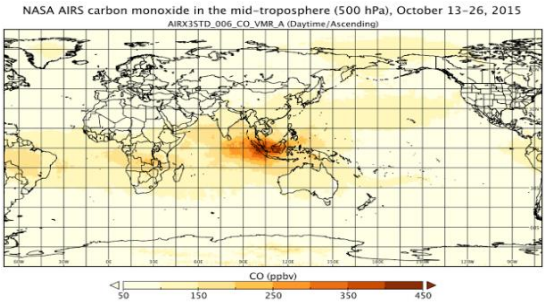
既にインドネシアだけで、温室効果ガスは 14.8 億トンの日本を抜き、異常な事態の図を示している。9 月からの火災の勃発で、下図 2 つのように気温が急上昇した。これはエル・ニーニョの異変であり、異変は急増して来年も続くとの予測である。とすると、「来年もインドネシア等で乾燥して火災が勃発する可能性」と一部の科学者が指摘しだした。

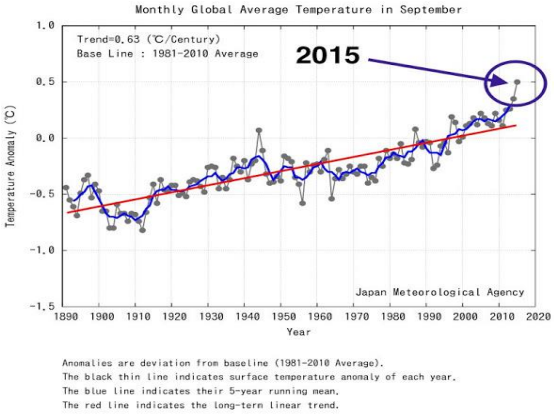
【不確実性災害等の想定対策と鉱山開発再検討を】

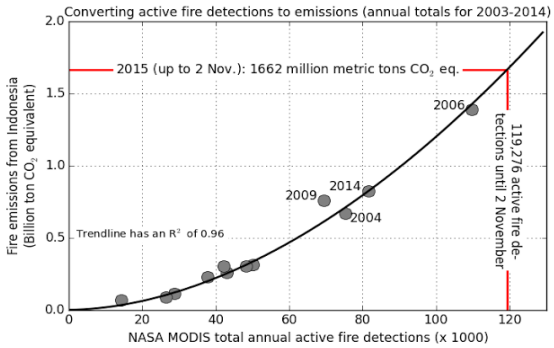
ヒマラヤ、南極の氷解もこの 5 年で凄まじく、それによる今後の洪水、熱波などの多発の予想だが、この洪水、熱波による被害想定と最悪の CO2排出量予測は 10 月までない。世界で今回のインドネシア等の火災で緊急対策を考慮しだした所だ。これらにつき交渉役の環境省局長に問うたが、「火災、鉱山開発等大半知らないことで今後に検討」とのことだ。

1、Data 入手も政府で分析出来ていないのが大半かもしれない。開発を一時停止し、調査・分析が先で、開発のためのアセスは止めねばならない。
2、10 月国連でも気温 4 度上昇もありうると話された。4 度上昇したら森林が 8 割近く損傷となり、大変。
3、人口増と気候変動で食糧生産の困難、森林破壊にも繋がる点等の検討が必要。だから私たちは、[Zero Deforestation(森林破壊 0)]を目指す。

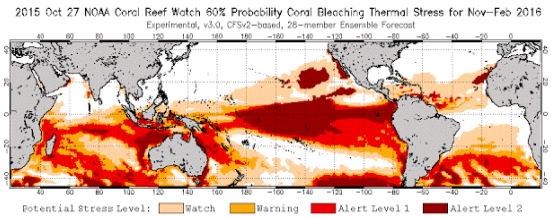








（インドネシアでの森林火災で気温上昇）



バスキさんインタビュー

「森の慟哭」などの作品を手がけるドキュメンタリー監督の中井信介さんがこの夏のウータンエコツアーに参加して、活動を撮影してくれました。その中から FNPF を長らく引っ張ってきたバスキさんのインタビューを紹介します！

私の名前はバスキ・ブディ・サントソです。2004 年から FNPF のスタッフを 10 年以上やっています。ジョグジャカルタで生まれ育ち、東カリマンタンの大学で森林学を専攻しました。大学を卒業してからは、森林を伐採する企業、石炭の企業、コンサルタント、国際的な NGO など 12 回ほど転職しました。・・石炭開発や森林伐採の現地で行われていることを自分の目で見たかったのですが、結論としては今自分がやっていることこそ本当にやるべきことだと確信したのです。

ここに来る前は国際 NGO にいました。彼らはプロジェクトを数年実施しては、終わったらサヨナラしてしまう。それに矛盾を感じて辞めた後、自分はどうなってしまうのだろうと悩み、気分転換にボランティアとしてきたのが FNPF でした。ここではいろいろとぶっ飛んだ状況がありました。スタッフがほとんど現地の人で、知識は無いがなんとかして緑化をしようとしていたのです。みんな小・中学校しか出ておらず、しかも違法伐採をやっていたような人ばかりでしたが、やる気と自信を持っていました。彼らの姿をみて、生きるということや勇気をもつことの意味を学びました。その時に、ここでみんなと一緒にやっていこうと思ったのです。

FNPF は設立当初は、オランウータンの保護に特化してやっていましたが、それだけではダメだということで、現地の人が自分たちのコミュニティのあり方を考えるような環境教育を行ってきました。村人と共に調和がとれた活動をしていましたが、2012 年にアブラヤシ企業の問題を巡って村人の間で不調和音が出てきてしまったのです。今まで築き上げてきた協力関係が、企業によって壊されてしまい、私たちと住民の考え方や意識の方向性が離れて行ってしまったように感じます。

私がここに来てから、森の変化を見ている限り、明らかに環境破壊が進んでいることがわかります。かつてはかなり木が残っていた国立公園さえも一部プランテーションが入り込んでしまっています。毎年森が無くなっていく一方で、私たちの活動は、森をできるだけ緑化して再生しようとがんばってきました。規模としてはまだまだ小さいけれども、パサラで 48ha、ブグルで 200ha、パダンセンビランで 120ha ほどの植林を行い、実際に植えた木にオランウータンが戻ってきているのをみると、やっぱりやってきてよかったなとうれしい気持ちになります。

一方、企業は政府から認可をもらって、どんどんプランテーションを拡大していっており、私たちはすごく長いプロセスで地道に再生している森が、ごく短期間で一気に開発される現実をみるととても悲しい気持ちにもなります。

FNPF がめざす将来像は、住民が主体となり、環境を破壊しない形でのオルタナティブな収入で生計をたてることと環境保全を両立させることです。それをめざして、これまでエコツーリズムや苗作り・植林、アグロフォレストリーを行ってきましたが、そこに住民を巻き込み一緒にやることが最も重要でした。アブラヤシ企業が入ってくるまでは苗作りや植林を村人がすごく頑張ってやってくれていたのですが、ある時いきなりやる気を失ってバラバラになってしまいました。企業が住民に対して甘い約束事をどんどん投げかけてきたのです。住民も残念ながらあまり企業の言葉を吟味するような教育を受けてこずに影響されてしまったと言えます。自分たちが時間をかけて

やってきた活動に対して培ってきたものが、どうしてこんなに簡単に壊れてしまったのかなと思うととても残念に思いますが、これからの立て直しを考える上でも、企業からの甘い誘いや約束事に簡単にこたえないよう、住民が自分の頭で考えて理解するための環境教育なり働きかけが大事だと思っています。

どこの国の人々も、生活をする上でパーム油を必要としており、パーム油を使った商品が私たちの生活の役にたっているのはそのとおりでしょう。ただ、その一方で実際にアブラヤシが生産されている現場でどういった状況になっているか、なにが起こっているのかをわかってほしいのです。中カリマンタンだけでもとても広いプランテーションが広がっており、これ以上はいらないだろうと私は思っています。

これからは、現地で様々な種の生き物が絶滅に向かっている、たくさんの森が破壊されている、人権侵害や不正義が起こっていることを明らかにした上で、プランテーションの拡大はこれ以上いらないので食い止めるよう世界中の人に呼びかけ、一緒になって声をあげていくことが大事です。

一番望んでいることは、森が守られること、私たち人間も生態系の一部として、自然と調和のとれた暮らしができること、その上で自分たちの子どもを学校へ行かせられるような収入を得ることです。それが守られることで、人々の権利も保証されるでしょう。実際にインドネシアでは天然資源が豊富で、たくさん森があり、川があり、海があり、天然資源が豊富なのだけれども、そういった資源をしっかりした管理のもとで、うまく調和をとりながら暮らしていくことをめざすことで、私たちの生活が守られていくのではないかと思います。

自分が初めて FNPF に来た時に「これって NGO らしくないな」と感心したことがあります。地元の人が多くスタッフとして関わっていて、スキルや学歴や職歴に関わらず、どんな人も参加できる学校のような学びの場のようだったのです。もちろん自分にとっても学ぶことがたくさんありました。FNPF は、地元で活動する地元の人たちみんなの NGO だと思います。彼らが両親から森について学ぶ、生きるということを学ぶ、自分なりの生きる哲学を身につけていく、そういう場にこれからもなっていってほしいと思っていますし、そういうことを通じて将来的には、地元から自分より優れたリーダーが出るように望んでいます。

イサムはほんの小さい時から FNPF で一緒に活動をしていましたが、「大きな NGO で働いてこい」といかせました。部下も何人も抱えるポジションを捨て、3 年後に帰ってきました。イサムによれば、自分が実際に大きな NGO で感じたことは、お金を集めてただ使うだけで、人との関係が全然家族のようではないなということでした。私もたくさんのことを彼らから学びました。アドゥは小学校を出て、砂金取りをしていたましたが、今はリーダーとして育っています。イサムも小学校を出て違法伐採をはじめ、軍に銃を突きつけられるような経験もしたが、今は大変な仕事をがんばってやっています。自分も年下の弟たちからたくさん学ぶことができ嬉しく思っているし、なにが彼らをそこまでさせるのかを考えたら、彼らの魂のようなものでないかと思うのです。彼らがこれからやろうとしていることを守っていきたいと思います。

ウータンの人たちのことはすごく特別に思っています。出会ってから、真剣にディスカッションしたこともあれば、いろんな冗談を言い合ったりしたこともありましたが、友人として関わってくれたみんなを特別に思っています。これまで築き上げてきたものは、ただの友人関係だけでなくて、心と心でつながっているような、コミュニケーションをとりあっているような、そんな関係だったと思います。これまで自分たちの友人になってくれて、家族の一部になってくれて、さらに新しい友人を日本から連れてきて家族を増やしてくれて、すべてのことに対してすごく感謝しています。

【通訳 坂井さん（多謝！）、文字起こし 石崎】

ボルネオ・エコツアー報告

橋本友里恵

今年も行われたボルネオ・エコツアーに参加した報告です。
〇実施日：2015/8/20(木)～2015/8/27(木)
〇参加者：8 名(石崎さん、酒井さん（インドネシア語通訳）含む)
〇場所：インドネシア・カリマンタン島、タンジュンプティン国立公園・タンジュンハラパン村(以下、村)
〇プログラム：①アブラヤシプランテーションの見学
②オランウータン餌やり見学(キャンプリーキー)
③植林作業
④村の小中学校見学
⑤マングローブ植林地見学および植林体験

① アブラヤシプランテーションの見学

村から船で約 1 時間、徒歩 30 分ほどの場所に森とプランテーションの境界がありました。
その隣接する森は 2008 年より現地 NPO である FNPF とウータンが開発を止めるため土地を購入し、守ってきた場所であった。しかし、昨年の 2014 年に放火とみられる火災により見渡す限りの森が焼失してしまった。乾季（3 月～8 月）には自然発火による火災は毎年各地で起こっているそうだが、近年はその件数が増加し、人為的な放火が疑われるケースも見られるという。そして何より熱帯地域であるのに“乾燥”していることが要因であという話だ。現に、この場所は 3 週間雨が降っていないらしい。プランテーションにするためには泥炭地である周辺に水路を設置し、水を抜き乾燥させることでアブラヤシにとっては生育しやすい土壌となる。しかし、そのことで乾季には乾燥が進みすぎて、有機物の分解もままならないような痩せた土地となってしまうようだ。

オランウータン餌やり見学(キャンプリーキー)

キャンプリーキーはオランウータンを森の中で野生の状態で保護をする施設である。そこで 1 日 2 回行われている餌やりを見学した。餌台の上にバナナなどの果実とおそらくミルクのバケツが置かれると、どこからともなく頭上からオランウータンが集まってきた。オランウータンは母子の親子連れが多く、中には 2 頭の子供を連れた親子もいた。全部で 8 頭ほどが見られた。ほかの多くの観光客(多くは白人)の見る前で、気にもせず食事をする親子。自然状態では絶対にありえない状況(オランウータンは本来単独行動で、食べ物の少ない森の中では広範囲で果実を探索している)で見世物のような姿を見て、とても複雑な思いがしました。餌場をここしか知らないオランウータンの子供はおそらく野生に放たれても生きていくには難しいように思えた。

② 植林作業

村から船で 30 分、徒歩 30 分ほどの場所に FNPF が行う植林グループの活動場所があります。周辺の若い林から発芽して間もない実生を採取し、ポットでしばらく生育して植林を行っている。FNPF のリーダー・バスキ氏は大学で林学を専攻しており、専門的な知識を元に樹種を選択し、植林を行っている。植林地で一番驚いたのは土壌の地質でした。植林地とは思えないほどの砂地で、海岸のビーチのような細かい砂です。このような土地では保水性が乏しいため、乾燥に強い樹種である必要があるそうです。バスキ氏の「熱帯林の破壊に比べたら植林で回復できる面積は小さいかもしれないが、それでもやらなければならないんだ」という言葉が印象的でした。

村の小中学校見学

インドネシアの学校は小・中・高で 6・3・3 年制である。村にも小中学校があり、朝 7：00 開始・昼ごろには終わりである。教科数は日本ほど多くはないようだった。1 学年 1 クラス、中学校は 3 人しかいない学年もあった。村の人々の多くは中卒または小卒で、高校や大学に行く人はとても稀だそうだ。

③ マングローブ植林地見学および植林体験

最終日、ジャカルタから車で 2 時間の場所にある、ウエットランドインターナショナル（湿地保全を行う国際 NGO）が植林を行うマングローブ林の見学と植林体験を行った。この地域の原生マングローブ林はエビの養殖場を造るために伐採、開発されてしまった。しかし、マングローブ林を失った養殖場は塩害と土壌流出などにより、生産性が著しく低下することが分かってきた。そこで、エットランドインターナショナルは養殖場を管理する人とともにマングローブの植林を行うプロジェクトを行っている。植えられているマングローブは 3 種類あり、ウータンが 2012 年に植林した木も 3 年で 2mほどに成長していた。植林すれば勝手に増殖できる生命力も持っている。

日本で教科書でしか知らなかったエビとマングローブ林を見て、このような取り組みが今後も続いてほしいと思いました。

〇ツアーを終えて

アブラヤシプランテーションの企業と村人との関係は、日本で言う原発の設置問題ととても近いと思いました。企業 vs 反対住民 vs 賛成住民という構図がそっくりです。しかし、住民だけが背負うには重すぎる犠牲を孕んでいる点で、彼らだけに問題を押し付けていていいのだろうかと思いました。どう向き合い、関わっていくかは一人一人が真剣に考えなければならないと感じました。

今回はドキュメンタリー映画を製作されている中井さん、インドネシア語通訳として参加していた酒井さんにより FNPF メンバーや元メンバーのインタビュー撮影も行われました。現地で活動する彼らの思いや活動内容、苦悩などを実際に聞くことができ、とても貴重な機会となりました。今後、ウータンとしてインタビュー内容を編集し、HP などで公開される予定です。こうご期待。

最後に、発展途上国といわれるインドネシアの市街は至る所にゴミの散乱し、青海泥の水の流れる、20 年前の日本のような姿に感じました。日本の 2 倍近くの人口を抱えるインドネシアが日本のような生活を始めたら、ものすごいエネルギーと資源が必要となると考えられます。おそらく 20 年と待たずに訪れるかもしれないそんな時代を前に、自分たち日本人の生活も見直す必要があるのではないかと感じました。

2015年ウータンエコツアーに参加して

アンダラス大学人文学部招聘教員　さかいみほ

この度初めてウータンの活動に直接参加する機会を得、自身でも初となる中カリマンタン（以下中カリとする）訪問を遂げた。私はこれまで日本のODAによるダム建設で被害を受けたスマトラ島の住民支援に10年以上携わってきたことから、スマトラ島中部（リアウ州および西スマトラ州）にはよく訪れる機会があったのだが、カリマンタンを訪問するのは初めてのことであり、しかもオランウータンやテングザルなどに会えるとあって、内心ワクワクしていた。

中カリへのフライトは当たり前かのごとく遅延、そして機内から見た景色も、私がこれまでスマトラで目にしたそれとさほど変わらなかった。開発による乱伐採、乾燥、そして森林火災。ここ数年、乾季と雨季しかなかったインドネシアにおいて、煙季という季節が1つ増えたのではと思うほどの煙害（haze）は、カリマンタンでもひどいようだった。今私がこのエッセイを書いている間にも、カリマンタンやスマトラのあちこちで火が上がり、社会生活が脅かされるほどにまで煙が広がっている。いかに人間の手で開発の名において森を破壊してきたか、それがこの結果である。何年もかけて自然に蓄えられた豊かな炭素を含む泥炭地が、森林火災によって失われ、そしてその煙が住民への害となっている。日本の我々にとっても他人事ではないはずだ。

そんな中でも、森と生態系を守ろうとがんばるFNPFの仲間たちに会うことができた。アドゥ君はじめみんなまだ若い。あどけなさが残る地元の青年たちだ。彼らをひっぱるリーダーはバスキさんといい、インドネシアの活動家には珍しく、大卒で経験豊富ながらインテリぶることなく、ごくごく自然体な彼。NGOというより「みんなの学校」であると胸を張って教えてくれた。出自や学歴は関係ない。違法伐採に携わっていた、砂金採りをしていた、などいろんなバックグラウンドを持った若者が、罪の意識を拭いきれずにここにやってきて、自分たちの森を守るために奮闘している。

しかし彼らの活動も決して順風満帆ではなかった。プランテーション開発を推進する企業側の分断工作により、これまで開発に反対してきた住民は割れてしまった。今では、アブラヤシ農園で労働者として働く住民も多い。同じ目的を持った住民がある利益のために買収され、そして容易に分断されるのは、ここインドネシアでは決して珍しいやり方ではない。むしろ、いかに反対を訴え続けるか、住民をしっかりまとめ上げるかという組織化の方が困難で、これにはしばしば国内の経験のあるNGOでも二の足を踏むことがあるほどだ。また、子供たちとの活動を通じて、どうやって親世代の意識を変革していくかという大きな課題もある。しかし、ここをクリアしない限り、彼らの活動にはやはり限界があるのだ。

FNPFは地元の人のためのもので、地元の人が動かしていくものだというバスキさんの言葉が心に響く。しかし私たちが感じた通り、若い芽は確実に育っている。あとはどうバトンを繋ぎ、住民とどのように未来を紡いでいくか、少しでも彼らの活動をサポートできれば、と思い西スマトラへの帰路についた。

パーム油学習会第３弾「サラワク先住民の声を聴け！」の報告

米澤興治

11 月 23 日に大阪梅田のケイゾクエナジーで実施しました。講演をしていただいた、樫田秀樹さんはウータン・森と生活を考える会代表の西岡さんと一緒にサラワクを訪れるなど、結成当時からウータン・森と生活を考える会と深い関わりを持たれ、現在に至るまでいろいろな提言や助言をしていただいています。樫田さんは 1989 年に以来２６回もサラワクを訪れ、ある先住民とは親子の関係を結ばれているというほど強いつながりをもたれています。当時は誰も注目していなかったアブラヤシプランテーションの開発問題を最も早くとりあげられ、調査・取材をされてきました。以下は樫田さんのお話のまとめです。

アブラヤシの問題で日本の環境保護団体によびかけたのは 1992 年でした。当時はプランテーションについては、そんなに問題はないというのが人々の意識でした。そこで、サラワクキャンペーン委員会で月に１～2 回の勉強会をはじめ、ぼくが見てきたことをしゃべり出し、農薬の専門家などにも話を聞いていくうちに大変な問題だと認識されるようになっていきました。

最初にマレーシアを訪れた 1989 年に、手紙でいろいろ問い合わせたところ、返事をくれたのが、地球の友マレーシアで、クアラルンプールの支部ではプランテーションでの児童労働の問題に取り組んでいました。半島のプランテーションには、インド系のタミル人の人たちが働いていました。当時は農薬の使用についての問題も大変深刻でした。農薬の問題については、マレーシアの女性弁護士がいろいろなプランテーションをめぐって「声なき犠牲者」という本にまとめました。男性はアブラヤシの実をとる作業ですが、女性は農薬タンクを背負って、農薬散布の仕事をしていました。アブラヤシはどんどん高くなってしまうので、高くなりすぎると、除草剤で枯らして、新しいものに換えていく必要があるのです。18 歳の女性が農薬タンクを背負って道を歩いているときに石につまずいてころんで、全身に農薬を浴びて亡くなるなどの問題も起こっていました。農薬のパラコートは危険なので 20 年前には禁止されたのですが、業界の反対にあって、また許可されるようになってしまっています。

アブラヤシのプランテーション開発は 1960 年代には半島マレーシアで本格化し、サラワクで本格化したのは1990年代です。そのころは先住民との間で土地の権利をめぐる争いが起こっていました。世界遺産になっているサラワクのムル国立公園に住んでいた先住民の土地が州の土地になってしまい、リゾート施設がつくられることに、反対運動が起こり、取材に行っていた私が反対運動をあおり立てたとして、1993 年に出入国管理法違反で逮捕されました。1 ヶ月間拘留と宣告され、結局犯罪は犯していないことがわかったので 1 週間で釈放はされましたが、その間尋問もなく、誰とも話ができないのでとても大変でした。その後マレーシアでは土地の収用の仕方がだんだん暴力的になり、先住民のデモに警察が発砲し 2 人がなくなるという事件が起こったり、農作業に行く村人とギャングが衝突して、ギャング 4 人が死亡する事件がおこり、村人 23 名が逮捕され、一人が有罪となったりしました。

2007 年に、パーム油の値段が高騰しました。土地を買いあさられるばかりだった先住民の一部に自分たちもやろうという動きが出てきました。先ほどの 4 名が亡くなった事件が起こった村でも、村長の娘さんが中国人と結婚して、金に恵まれており、自分の畑をプランテーションにしたところ、月収 94 万円程にもなったそうです。普通 3 万円ほどで余裕の生活ができるので、大変な金額です。サラワ

クでは、裁判では先住民が勝訴することがありますが、企業はなかなか判決には従いません。企業は、はじめは村の端の方だけを開発して様子を見ます。抵抗しない村に企業は進出していきます。

森林からの木材の伐採は、いずれは森が再生されることもあります。プランテーションの場合は森は皆伐され消滅してしまいますが、村は残ります。さらに、最近各地ですすんでいるダムの建設となると、村が完全に消滅してしまうのでさらに大きな問題だといえます。

ダムの問題に対しても、サラワク政府も、それほど強硬ではなくなってきています。国際的な世論喚起が必要で、国際的なＮＧＯも監視しているので、サラワク州政府に「みんなが見ていますよ」というメッセージを伝えることが大事だと思います。

マレーシアでの言論の状況は、一時はＩＳＡ（国内治安法）により、政府に異を唱える人たちが逮捕され、マスメディアも報道を自粛していましたが、雑誌やネットは自由でした。現在では昔よりはだいぶましな状態のようです。

また、企業と先住民の利益の配分でも、先住民に有利なように変わってきています。

ただ、開発に反対している村長は少数派で、暴力的に開発するだけでなく、会合で酒が出て丸め込まれるという場合もあります。いい情報だけが入って、悪い情報が入らないので、あるＮＰＯがドラマを作って巡業したところ、賛成していた村長が反対を宣言したということもありました。

また、住民もスマホで情報を得るようになってきました。1963 年頃から教育制度が浸透し、30 歳ぐらいになってから、村に戻ってくる人も出てきました。生まれ育った村を立て直そうと頑張っている人もいるので、期待したいです。

以上です。

『インドネシアの森を守ろう！緊急集会 -私たちの生活とパーム油開発のつながり-』の報告

加納隆

日時：11 月 21 日(土) 13 時～17 時　　場所:大阪聖パウロ教会１階

今年、カリマンタン島（ボルネオ）で、最大規模の森林火災が発生し、放出された CO_2 は 16 億トンと日本の年間温室効果ガス総排出量を上回るまでになりました。

火災の原因の一つは、私たちが日常生活で多く使用するパーム油の為のアブラヤシ開発です。

資材が少ないなか、命がけで消火活動に励む現地の NGO の仲間達、そして森林再生への動き！

彼らを支援する為の緊急集会を行い、森林火災消火の難しさや、現地の利害関係、物資の問題等

現地の生情報と具体的な支援策、質疑応答が活発に飛び交い多くの寄付金が集まる集会になりました。

まず、ウータンは 2016 年初頭の支援に向けて活動していきます。

質疑応答より：

・地平線までの(プランテーションの)写真はインパクトがあった

・大学の地球温暖化の授業から推薦されたイベントの１つとして来た

・火災の原因、通報、消火はどのようにしているか

・プランテーション企業や自治体の動きや、火災の責任はあるか

・火災を止めるより、おこさない方法をどうするか?

世界の森林ニュース　World Forest News

2015 年 7-11 月

(by Badman Nishioka)

【国連、世界の森林消失率は 90 年比で大改善】

森林消失のペースが、1990 年以降大幅に改善していることが 9 月に国連が報告。だが消失面積は南アフリカの国土と匹敵と。同報告書で 1990 年以降に失われた森林は約 1 億 2900 万 ha に上ると指摘。Good News!　[資料:the United Nations 9/7]

【違法材対策の新法案へやっと動く日本】

自民党林政小委員会は 7 月 3 日、海外で違法伐採の木材が日本に輸入されるのを防ぐため、民間輸入業者等に合法かの調査を義務付ける新法案の策定を決定。議員立法として年内の成立を目指す。「10%がマレーシア、インドネシアからの違法材を輸入か」と林野庁が言う。　[資料:毎日新聞 7/3]

【違法伐採対策進捗の新報告書、生産国で減少】

2013-14 年の 19 カ国の森林政策や違法材対策の評価は違法材貿易が世界中でまだ 10%残る。生産国での違法材輸出は減少も政策強化が必要で、違法な土地利用転換が課題とチャタム・ハウスが指摘。[資料:7 月 Chatam House 等]

【今も続くミャンマーから中国へ違法材】

ミャンマー北部で違法伐採繰り広げる中国人をミャンマー軍が摘発・逮捕。国際 NGO・EIA は国際市場向けの家具を作る中国企業の仕業で、両政府に停止申入れ。[フェアウッド News/EIA,10/9]

【サラワク・バラムダム、建設一時停止! 勝利報告】

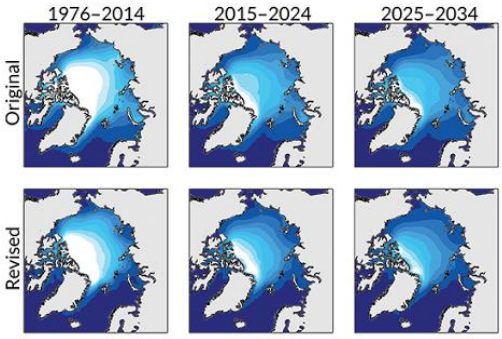
9 月 23 日、ブルーノ・マンサ・ファンドからメールでマレーシア・サラワク州先住民が建設停止を求めるバラム・ダム建設に対し、州政府はダム建設を一時停止し、小規模な代替エネルギーを進める評価を発表と。「画期的勝利」とバル弁護士からも連絡有り。

【アフリカ 5 カ国、違法材貿易に対抗の合意】

ケニア、ウガンダ、タンザニア、マダガスカル、モザンビーグの 5 カ国が合意し、後は実行！9 月 5 日の情報だ。[mongabay.com]

【NGOs の活動等で、シェル石油北極海開発停止】

2013 年 2 月に一時開発停止表明していたシェル石油は表明と反対に動いていたため、今年 3 月頃から EU の NGOs が幅広く動き出した。ドイツ等は一度表明したから開発停止に賛同し、シェル石油は再度「開発停止」と発表。アラスカの大火災もあり、オバマ大統領も 11 月 2 日に「米国は北極圏の油田開発のキャンセルを発する」となり、50社以上が賛同し、異常に進む北極圏異変に[待った]をかけるかも知れない。ただしロシアでは資金難で 2 企業が開発を諦めずにいる。[WhiteHouse とグリーンピース 9/28 等]



【国連、2030 年目標気温上昇 2 度未満達成困難と】

10 月 30 日、パリ会議へ向けての会議で気温上昇を 2 度未満にするのは困難、各国が最善策実施検討と総括した。温暖化効果ガス排出 1 位の中国は、「2030 年までに減少へ転じる」との曖昧目標で、3 位のインドは国内総生産当たりの排出量を同年までに 2005 年比で 33-35%減とし、4 位ロシアは 25-30%減の目標。日本は原発再稼働を見込んだ案で 2013 年比 26%削減を突如提出(基準年 2013 年で原発全停止で削減量が大幅増加も、再稼働で 2 割を原発で実施とする)。国連は「同年の削減目標値 420 億トンにさげなければ困難であり、各国の削減目標を合わせても 540 億トンで、今世紀は 3 度になる」と見通しを 11 月 6 日発表。[資料:国連、11・7 読売新聞]

【2020 年へ世界の 400 企業が森林破壊 0 に協力】

パーム油関連で 2020 年までの”ゼロ・ネット森林破壊”を目指すとする世界 70 ヵ国約 400 社が動き出す。[コンシューマー・グッズ・フォーラム 8/11]

会計より（２号分をまとめて掲載しています）　2015.5.20～2015.12.2

井下祥子

＜会費・カンパをありがとうございます！＞

＊関西 NGO 協議会より、29万の基金をいただきました。活かして使わせていただきます。

☆振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。
　領収書がご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。
　ウータンへのご要望・ご意見などもお寄せください。（掲載させていただくこともございますので、掲載不可の場合はお手数ですが、お書き添えください）

～おたよりから～

＊がんばってください！来週からアマゾン入りで29回目になります。（南研子）
　いつもご支援ありがとうございます！アマゾンの奥地、先住民の村への旅。たくさんの困難や危機をのりこえ、村おこしプロジェクトに力をつくされる研子さんたちと村の人に頭が下がります。（井下）
＊すばらしい活動をしていると思っています。11月にはP.N.Gへ3人でいきます。
　こちらも熱帯林保護の仲間。息長くパプアニューギニアの問題に取り組んでおられます。（井下）
＊森林火災緊急カンパと会費をお送りします。（浅田聡）

☆ウータンは消費問題に取り組むグループとともに消費者・企業に働きかけるなど、今後も「結果」を出すべく、精力的に活動を行います。森林火災と闘う現地 NGO の支援など、会費・寄付は活かして使わせていただいております。　ご支援をよろしくお願いいたします。

＊＊

ＨＰリニューアル	ウータンの若手がラジオに出演
只今、新しいＨＰを作成中です。順次コンテンツを増やす予定でおります。是非、ご覧ください。 http//hutangroup.org/ ※緊急募金ページ検索キーワード「オランウータンの森林で大規模火災	ＦＭ79.７京都三条ラジオカフェの「きょうとこれからラジオ」と「環境市民のエコまちライフ」いう番組にウータン会員の武田裕希子さんが出演しました。とてもいい内容でした。以下のＵＲＬでお聞きになれます。 http://kyotokorekara.jp/archives/2015/12/ （「年月別アーカイブ　2015 年 12 月」） http://radiocafe.jp/200304006/episodes/2015-12-7oa/（「インドネシアの森を守ろう①」）

インドネシアの森林火災からオランウータンを守るために闘っている

パウリヌス　ワンワールドフェスティバルに来たる！

　パウリヌスさんはC．O．P．（オランウータン保護センター）の若手メンバー。インドネシア現地の生々しいお話が聞けると思います。パウリヌスさんについて、詳しくは本誌 3 ページをご覧ください。

日時・場所：２月６日（土）15:30～17:30　北区民センター１Ｆ第４会議室
　　２月７日（日）12:30～14:30　北区民センター１Ｆ第１・２会議室
（地下鉄堺筋線「扇町」駅 2 号-B 出口北へ 3 分 JR 環状線「天満」駅　西へ 3 分北区役所隣）

インドネシア大規模森林火災緊急募金のお願い

　タンジュンプティン国立公園付近の森林火災にたいして、最前線で消火活動をつづけてきたバスキさんをはじめとするＦＮＰＦのメンバー達。来年の森林火災に備えるために、ジェットシューターなどの機材が圧倒的に足りません。皆様の募金を機材を購入するなどして、バスキ達に直接届けようと思います。是非、募金にご協力ください。詳しくは本誌ｐ２をご覧ください。送金先は以下の通りです。

ゆうちょ銀行　００９３０-４-３８８０ ウータン・モリトセイカツヲカンガエルカイ
※「インドネシア火災寄付」と用紙に記載してください。

ウータン総会

◆日時：１月３１日（日）　午後１時より～５時

◆場所：　ケイゾクエナジー（コープ野村梅田 1310 号室
大阪市北区鶴野町４）
（インドネシアの現地報告もあります。）
※問い合わせは、石崎（issy@pure.ocn.ne.jp 090-8145-1146）西岡（hutan.nishioka@docomo.ne.jp）まで